

杏雲堂病院というと、よく「御茶の水に古くからある病院」と言われますが、事実、明治14年(1881)に杏雲堂醫院の名で、初代佐々木東洋(1839-1918)により始められた歴史があり、今年は創立125周年にあたります。これから何回かに渡って、杏雲堂病院にまつわるお話しを書いていきたいと思えます。

さて、明治初めの御茶の水駿河台というと、全く今の街の有様からは想像も出来ませんが、「樹木が多く、笹藪の中に人家があり、狐や狸が出没する有様であった」と、創立百周年に出版された「杏雲堂病院百年史」に書いてあります。

最初は、二階建てで20床でしたが、脚気、結核の患者が非常に増えてきて、明治26年には同じ二階建てですが一気に80室となり全て個室(80床)だったそうです。病院はその後、二代目の佐々木政吉(1855-1939)院長のもとで順調に発展していきましたが、大正12年(1923)9月の関東大震災で一日にして灰と化し、残ったのは「病床日誌、東洋の胸像、けやきの大看板のみ」だったと記録されています。しかし幸いにも100名ほどの患者は、三代目佐々木隆興(1878-1966)院長他全員一致の努力で無事上野公園まで避難でき、夜は精養軒のご好意で大広間に寝ることが出来たそうです。

その後、仮の診療所を作って医療を続けましたが昭和4年(1929)に現在の杏雲ビルのあるところに、鉄筋コンクリート建て、地下1階、地上5階、70床の病院が新築されました。大震災の経験から耐震耐火に留意し、冷暖房、給水、給湯も完備し、全国でも模範的設備の病院と評価されたそうです。しかしながら、第二次大戦時の空襲でかなりの被害を受け、その後改築増築を続けていましたが、結局昭和63年(1988)、現在地に地上9階、地下2階、208床の病院として新築移転したのが今の杏雲堂病院です。

なお、佐々木東洋、佐々木政吉、佐々木隆興の胸像が杏雲堂病院の玄関前に、詳しい年譜や病院の写真が1階ロビーに展示してありますので是非ご覧下さい。

さらに、財団法人佐々木研究所のホームページもご参照下さい。

<http://www.sasaki-foundation.jp/index.html>

すこやか通信(平成18年5月号掲載記事に加筆訂正)